影生まる

辻　紀子

ひとしめりありたる朝や貝母咲く

初蝶の庭師を追うて影生まる

梅の夜の胸から外す黒真珠

仁王門より踏青の一歩かな

合流の水音近し雛の町

家族と来てときどき独り鳥曇

蝮草渡るほかなき橋ひとつ

満水のダム満開の桜かな

柳絮飛ぶ間口の狭き佃煮屋

喪の旅にして桜また山桜

花びらに触れ花筏ほぐれゆく

城跡に土鈴を振れば花吹雪